ぴっぴだより

No.10 2019.12.2

先日、モンベル主催の冒険塾に参加してきました・・・同行者は、常にchallenge精神たっぷりの夫と、山村留学生活で自分を立て直し、現在は山小屋で働きながら大学生をしている息子。この冒険塾は、「今こそ、冒険を見つめ直し、その行為の持つ価値が評価される社会の実現と、他人と比べることのない、自らの冒険を目指すchallengerを応援したい！」と毎年開催されています。塾長、辰野勇氏の言葉です。「好奇心を充足するために、人は時に生命をも顧みず未知の世界に一歩踏み出す。その行為を冒険と呼ぶ」・・・・・今年の講師は、次のお三方。高校時代、進学先を「地球探検」と決め、今、人生を極地に掛けている犬ぞり北極探検家の山崎哲秀氏。3年4ヶ月、シリアの武装勢力に拘束され、死を背に感じつつ、やりたい事ができない辛さを経験、後、解放された安田純平氏。過去の上に在る"思いつき"により、その人生がバージョンアップされるとし、たとえリスクがあってもやらざるを得ない、その行動こそが冒険だ!!と熱く語った、探険家で作家の角幡唯介氏。・・・・私たちの現実からは遠く離れた世界の話のようにも思えますが、実際に、その信じ難い時間を過ごしている（過ごしていた）ご本人の生の声には、「今を生きている」という力が強く在りました。底知れぬ説得力も在りました。と同時に、その陰には、家族の理解、家族の絆があることをきっかけ、冒険の2文字が、決して特別なものではないと感じたのです。

さて、帰宅した私は、書棚から、ある本を取り出しました。斉藤洋氏の『冒険者たち』2冊ありました。夫が少年時代に買った昭和54年発行の第2刷で、かなり年季の入った文庫本と、鈴木正幸氏の描く表紙のオオミズナギドリのツブリの表情が素晴らしい箱入り本。この『冒険者たち』、過去にはTVアニメで、また最近では劇団四季やシアタージョイが劇にしていたり、さらに嬉しいことに、オーディオブック版も登場。まあ、在り方は、さておき長年、子どもから大人まで、広く愛されている物語には、違いありません。流れゆく時代の中で、愛され、必要とされ続けている、この物語の底力が、とても魅力的です。

薄暗い灯の下、私はその頁をめくり、そして なぜか、声に出して読みたい衝動に駆られて、読み始めました。主人公は、ガンバというドブネズミです。

ガンバは、台所の下の貯蔵穴に住んでいました。
……猫に襲われる心配もありません。
……
ガンバは野菜をかわえつけてある細いなわをこまかくみぢり、野菜と壁の間に真ん中まで入こまして、つめあげ、そこをねぐらにしていました。
……見つかる心配はありません。……
野菜の山を登り、（野菜の少ない時は、つるの間のかめに、とび乗り、野菜をひっぱり上げ足台にし）揚げぶたのすき間に頭を入れてふんばるのです。
すると、すき間はガンバが出入りするのにちょうどいいくらいに開きます。
それから両手を揚げぶたの表面におき、力を入れ、同時に足で足台を強くけります。
鉄棒にとびあがると同じ要領。
すると、ガンバはたちまちにして台所の床の上にあがるのです。

ここ迄、読んだ時、私の頭の中には、ガンバと共に、ぴっぴの子どもたちが登場!! 驚きです。あのカマドウマ小屋の映像が見えます。どんぐりさんが、必死に登りたがっている姿、登るために、あれこれと工夫している姿、子どもたち同士の助け合い等の関わり。子どもたちにとって、隠れ家だったり、ねこちゃんの住処だったり、基地だったり、その様子を変える小屋。ぴっぴの日々の光景です。ぴっぴの子どもたちは、好奇心を充足するために、今、自分ができる力を全て使って何かを思いつき、行動している・・・・冒険しているんだ!!と、瞬間的に思いました。物語のゆく先と同様、子どもたちの成長が楽しみでわくわくするのも当然です。

ガンバの姿は、思春期から青春期の自画像だと語る斉藤氏。そんな若者が、今、大切にしている時間が、子どもたちへの『読み聞かせ』。このところ、読書が、子どもたちにとって休憩時間になっている事を問題視。休憩を求めて読書をしても、本気になってその世界に入りこめない。大人になってからも、昔読んだ本に助けられる、って事があるけれど、これでは心に残らない。世界がどんなに広いものか、世界にはたくさんの人たちがいることも、いろんな生き方、考え方があることも、本を通して考えてあげたい!!と。戦時中の自分の体験から、斉藤氏はそう語っていますが、世の中が大きな変化の渦中にある今も、実は同じではないかと思うのです。子どもたちが、自分の世界を拡げ、体がムズムズし、行動する、体験する、そして経験を積み重ねる。本が決して全てではありませんが、これからを生きる子どもたちへのプレゼントのひとつにしたい!!

この原稿を書きながら、ぴっぴが大切にしている絵本の時間への思いが、さらに強く、深くなりました。ぴっぴの子どもたちは、本当に絵本が好きですね。

とことん、遊ぶからこそ、絵本に夢中になれるのでしょう。

根っからの本好きな、我が家の男二人が、勝手に出たり、人と違う道を選び面白がっているのも、なんだかわかる気がします。

〈起子〉